長崎の開港前夜
―長崎開港450年―

日本考古学協会員　　東　貴之

今年は長崎開港450年の節目に当たり、1971 年の開港400年の時と同様、様々なイベントが開催されます。開港以前の長崎の姿はこれまでに多くの諸先輩方の研究があります。簡単ではありますが長崎が開港に至るまでのいきさつをお話したいと思います。

平戸に始まるポルトガルとの貿易は横瀬浦、福田（口之津）を経て長崎へ移っていきました。
1550年の入港以来、平戸は貿易港として繁栄していきました。この時の領主は松浦隆信。ところが1561年、貿易品をめぐりポルトガル人と日本人の間に事件が起こり、船長が殺害される事態となりました。そして次の貿易港として大村領の横瀬浦の測量を密かに行い、結果、平戸に代わる港であると判明しました。この地の領主は大村純忠です。

写真1―横瀬浦遠景

横瀬浦は開港によって教会が建てられ，それに伴う集落も形成されました。これを知ったキリスト教徒や商人が全国から集まり、港はさらに繁栄しました。しかし、1563年、大村純忠の反対勢力によって焼き払われ、開港1年余りで廃港、この時、教会も破壊されてしまいました。

翌年、横瀬浦に入港できなかった3隻のポルトガル船が平戸に入港しましたが、松浦隆信の子、松浦鎮信のキリスト教に対する敵意、そして、それを咎めない隆信の態度が彼らに平戸以外の港の開拓を決意させました。1565年、平戸を目指して航行をしていたポルトガル船は入港先を大村領の福田浦へと変更しました。

大村氏との貿易が再開したので松浦隆信は福田浦を襲撃しました。しかし、戦いはポルトガル人が勝利、松浦氏が多くの損害を出して退却していきました。このほか1567年と1569年には有馬領の口之津へポルトガル船が向かった記録も残っています。その後1570年、ポルトガル人は福田浦周辺の測量を実施，長崎の港が貿易港として最適であるとしました。

写真2―長崎甚左衛門純景

開港前の長崎は在地領主の長崎氏が住んでおり、城下町である桜馬場や鳴滝・中川の一帯を中心に生活をしていました。

1567年、布教長コスメ・デ・トルレスは布教活動のためルイス・アルメイダを長崎の城下町へ送っていました。その頃、長崎は1500名程の住民が暮らしていました。アルメイダは元商人と医師資格を活かして布教活動を行い、結果、500名もの住人をキリスト教へ導く事が出来ました。アルメイダの後はアイレス・サンチェス、そしてガスパル・ヴィレラが引きつぎました。ヴィレラの熱心な布教活動は多くの住民をその道へと導き、それまで住んでいた長崎氏の菩提寺を取り壊して長崎初の教会となるドーン・オス・サントスを建立しました。

1570年、長崎港を福田浦に代わる貿易港として発見したポルトガル人は、開港許可を申請します。申請を受けた大村純忠は、家臣の長崎領主である長崎甚左衛門純景と友永対馬に協議をさせ、森崎と言われる岬付近に町屋の建設と港の開港を約束しました。

1571年、ついに長崎が開港されました。そして完成した町が6カ町（大村・平戸・五島・島原・横瀬浦・文知）として新しい長崎の町をけん引していきます。そして森崎の先端に岬の教会（サン・パウロ教会）が建立されました。

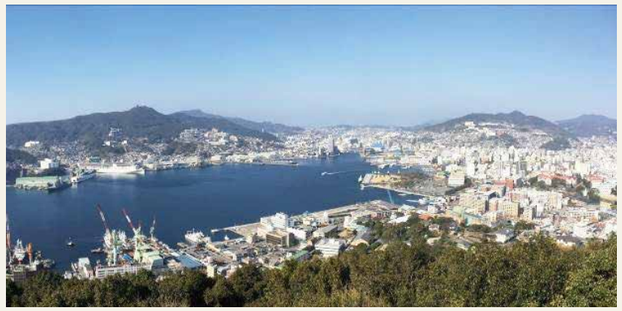
写真3―長崎港遠景

2021年、長崎開港450周年

特集1

ときめく みなと、つながる みんなと

The Enchanting Port of Nagasaki : A Global Intersection

NAGASAKI PORT 450th ANNIVERSARY

公式HP

長崎港は1571年（元亀2年）にポルトガル船が交易を求めたことを契機に開港し、今年で開港450周年を迎えます。

このため、長崎開港450周年記念事業実行委員会（事務局：長崎市）を設立し、長崎のみなとまちに対する県民・市民の想いを過去から現代、未来に繋げ、機運を醸成し、新しい姿を創っていくきっかけにするため、今年4月から様々な記念事業を展開していきます。

未来

長崎開港450周年記念事業

感謝・愛	港	まち	未来
長崎港への感謝・愛を伝える	長崎の海と港に親しむ	長崎のまちの原点を感じる	開港500年へのスタート
4月27日 記念式典 4月23日～4月27日 スタートアップイベント	7月31日、8月1日 ながさきみなとまつり	10月16日、17日 長崎開港フェスタ 450（ヨンゴーマル）	1月29日予定 海洋シンポジウム（仮）

長崎港×歴史　小学校歴史パネル巡回展

長時港×歴史　開港450周年デジタルスタンプラリー

長崎港×ときめき　長崎港まちなかフォトスポット

長崎港将来像策定